

[優秀賞]

石井 靖子さんレビュー (秋田市)

書評対象図書

町田 康 著『口訳 古事記』(講談社)

すこぶる笑える日本の神話

新喜劇をご覧になったことがあるだろうか。毎度おなじみのセリフとオチ。そんな「お約束」に、私たちはお腹を抱えて笑ってしまう。

イザナギとイザナミの国造り、天岩戸に隠れたアマテラス、スサノオが退治したヤマタノオロチ、日本中で祀られているヤマトタケル。本書では、なんとなく知っているけど詳しくは知らないこれらのお話の元ネタである古事記が、新喜劇さながらのイキのいい大阪弁で語られている。

古事記といえば現存する日本最古の書物という知識はあるが、文章が難しい、登場人物が多いし漢字ばかりで読みにくい、だから内容が理解できないという三重苦を抱えているので、読み通せない本ナンバーワンと言われている。その難解な物語が、町田康の独特なリズム感ある文章と「マジですか」「マジです」「いやよー」「こわいー」というセリフが何度も出てくることで作り出される「お約束」によって、とにかく笑いながら読み通せるという仕掛けになっている。

ところで、古事記にはたくさんの神様が登場するが、ここに出てくる神々は人間を救ったり導いたりはしてくれない。男の神様と女の神様は出会うなり結婚するし、スサノオは仕事もせず暴れまわっている。ウサギを助けた優しいオオクニヌシは兄達に何度も殺される。そんな現代の感覚ではNGな出来事を、本書では「なんちゅうことをさらすのか」とツッコミを入れつつも「神なので仕方ない」と納得する。そこで読者も、まあそういうものかと正しさではなく現象として受け入れてしまう。これもまた町田康が作り出した「お約束」のなせる技なのである。

およそ1300年前に記されたこの古い物語は、おそらくそれよりずっと以前から後の世代に伝えようと語り継がれてきたのだろう。しかし残念ながら言葉は変化するもので、当時の言葉は現代の私たちにはひどくわかりにくいものになってしまった。今、痛快な大阪弁で口訳として復活した古事記は、再び人から人へと伝えられる機会を得た。イザナギとイザナミが生み出したこの大地の上で、長い時を経て受け継いだこの物語を手に取り「マジですか」「マジです」「いやよー」「こわいー」と言いながら、目の前に横たわる煩わしい日常と対峙するパワーをアナーキーな神々から受けとってほしい。